

の心になりつ、おこなひて、姑の死去まで付添ひ申され候と、よろこび涙をながしつ、かたる、我も思はずはなうちかみぬ、

〔續近世畸人傳〕いとめ

いとめは若狭三方郡早瀬浦佐左衛門が妻なり、孝心深くよく舅姑に仕ふ、姑は先に死し、舅年八旬に餘り、老耄して非理なることをいひの、しれども、少しも逆ふ色なく給仕す、ある日いとめ外より歸りたるに、老人藁をちらして孫とあそぶ、何事をし給ふととへば、子産まねしてあそぶ也といふ、さらばわれも子を産んとて、又藁を持來り同じく戯れば、老人興に入ること斜ならず、其他のあつかひもおして知るべし、藩蹊云、老萊子が兒戯をなすに、一とせ深雪軒をうづむころ、茄子の美を食んといふ、いと心よくうけがひ、近きほとりの寺に走りて、茄子の糖漬をもらひ、水にひたして鹽を去、羹にしてす、む、○中略つひに其行狀を國侯聞し、召、米若干賜り、家の租をも免し給ふとぞ、

〔雲萍雜志〕勢州關の商家に吉右衛門といふものあり、實母に孝養至り、四十餘歳のころ、家業に出で、歸りける時は、その母いとけなきをりからの心を抱きて、吉右衛門が足を洗ひつかはすべしといふに、背かずして洗ひ給はるに任せたり、この一事を以て、よろづの行ひ違へるところなきを知れり、○下略

〔雲萍雜志〕三島原の難波や與左衛門といふ遊女屋に、濱萩といふ太夫あり、もとは播州高砂の商家惣七といふもの、娘にて、人の家に嫁しけるが、その家衰微に及びて、夫に捨てられ、親のもとにかへりけれども、親の家もまたおとろへて、父母を養はんが爲に、與左衛門が方に身をうりて、遊女とはなりしなり、その頃與左衛門は、江戸の廓へ移りける時にあたりて、よき遊女をつれ行かん、と、十一人の遊女をえらみける中に、ことに濱萩はよの志し尋常ならず、風雅の道にもうと